

解 答

〔一〕

- (一) ① 街の人を描くため。
② 描く相手と交流することの楽しみ。
- (二) 学生的设计図は、建築のなかでの人と人とのつながりとしての社会を描いてはいるが、それと実社会とのつながりが考慮されていないから。
- (三) 1 尊厳 2 志向 3 固有 4 革新 5 視野 6 逆境
- (四) 社会や～や価値
- (五) D 早く、安く建てることor先進的で、性能や効率
E 根無し草
- (六) 泥の家の街に生きる人々が、貧しさのなかで、力強くたくましく生き抜く力を持っているところ。そうした力を感じること、先進的技術を学んだ学生たちが、自らの風土や社会から目を反らしたり、問題から逃げたりせず、持てる技術を社会に根ざした形で活かすことを、筆者は期待している。

〔二〕

- (一) 明るくはなやかだった
- (二) ① イ ② カ
- (三) 1 エ 2 ア 3 ウ 4 オ 5 イ
- (四) 花のかたちを持った桜
- (五) まだ咲いていたのに傷つけられた、痛みや悲しみ
- (六) ウ・カ
- (七) まだ咲いていた桜の花をむしり取ってしまった罪悪感があり、桜がより痛めつけられることを心配したから。
- (八) 自分が摘み取ってしまった桜の花が水に浮かべられて生きながらえると知り、ほっとした。また、その様子の美しさを想像し、幸福感を覚えている。

解 説

〔一〕

- (一) ①「何のためですか」ではなく「何をするためですか」と問われている点に注意しましょう。解答欄のサイズのにも、ここは簡潔に「人を描くため」「街で会った人を描くため」で結構です。
②本文4～5行目「相手との交わりが楽しい」とありますので、「描く相手と交流することの楽しさ。」のようにまとめましょう。
- (二) ここで作者が「小さな社会」と言っているのは、学生が製図板の上でかいた図面のことです。それがなぜ「小さな社会」なのか、それは本文の広範囲（「ある学生の図面の前で～本当に小さなことなのかもしれない……。」本文16～39行目）に書かれていますので、自分のことばでまとめる必要があります。必須要素は①人と人の結びつきについては考えられている②実社会とのつながりは考えられていない、の二点です。
- (六) ここまでの作者は、自分が学生たちに教えていることが現地の人々にとって本当に役立つものであるのかということ、また、学生たちの地に足の着かない上昇志向に対して、不安や迷いを持っていました。それを救ったのがひとりの学生の言葉です。作者の不安や悩みがどう変化したのかは、「僕が悩みの果てに見いだしたのは、～学生へ伝えようとしたことだ。（本文2ページ42～53行目）」にあります。自分のことばで、という指示がありますので、本文の表現にとらわれすぎずにまとめましょう。ポイントは、①「学生たち」と「道端の人たち」を結びつける②作者が「学生たち」に実社会に出てからどう生きてほしいと思っているのかを書く、ということです。

〔二〕

- (一) “ほの暗い”理科教室、ということばと対照的な表現を考えましょう。「明るく生き生きとしていた」「明るくかがやいていた」「明るくはなやかだった」などが考えられます。
- (二) ①イだけが文の主語ではありません。この一文は「(私たちは) めしべは縦切りにして断面図を描く。」の「私たちは」という主語が省略されています。②カだけが二文節（歩いて／いつ）で、動詞を二つ重ねてあります。他はみな一文節の複合動詞です。
- (五) 本文9行目に「桜の花の解剖も同じくらいこわかった。うすい花びらははがすとき、桜が『きゅ』という声をあげるように思えた。」とあります。また11行目には「花のかたちを持った桜は、触れてはならないもののよう感じられた」ともあります。これらから、作者が「かたちを保った桜は傷つけられるときに声をあげるようで、それがこわい」と思っていることがわかります。従ってここでは「生きているのに傷つけられる悲しみ」のよう

に解答をまとめましょう。

- (六) 理科教室での解剖がこわかったのは、教室の暗さのせいも大いにありました。本文 16～19 行目からは、「春の日曜日の昼間、うらうらとした日差しの中で、何個も花を取っているうちに、だんだん愉快になってきた」という作者の心理が容易に読み取れますね。答えはウとカです。
- (七) 問五でも見たように、作者は自分が解剖した桜の花から、生きているのに傷つけられた悲しみを感じ取りました。おばあさんに会った時は屋外で楽しく観察していたとはいっても、桜の悲しみを忘れたわけではありません。そんな作者は、おばあさんが自分のあげた桜をどうするつもりなのか、気にかかったのです。
- (ハ) 作者は、水の満たされた器に桜をあける瞬間を想像した時に、まるで自分がその桜になったかのような気がしたのです。傷ついた体をひんやりとした水に浮かべてもらう安堵感を、自分と桜を重ね合わせて感じると共に、その美しい光景を思い浮かべ、うっとりしているのです。